

## 企画展の概要

令和3年度 夏の企画展

# 義足は語る

## ～戦争で足を失った戦傷病者の歩み～

### 開催趣旨

---

本展は、戦争によって足に障がいを負い、“立つ”“歩く”という行為を義足とともに歩んで来られた5人の戦傷病者のパーソナルヒストリーを見つめるものです。義足は、どのような経緯で作られ、戦傷病者の足となり、最後に当館へやってきたのでしょうか。

兵士の負傷原因は、戦闘行為によって銃弾や爆撃が当たるという直接的なものだけでなく、医薬品の不足によって引き起こされる感染症、行軍中の事故や厳しい生活環境による凍傷などもありました。戦争という過酷な体験の中で、足を失ってしまった方が多くいました。

身体の傷が癒え、治療が終わると、次は社会復帰のためのリハビリが始まります。義足を用いて、立つことから始まり、歩く、そしてその足で生活をし、働く、これらの行為が如何に難しいものであったのか、使用者それぞれの思いと共に労苦を振り返ります。戦争で身体の一部を失う「別れ」の経験、義足という新しい身体を装着する「出会い」、その後の義足と共に歩んだ人生を見つめます。

展示品は、当館に寄贈された義足のほか、身体から取り出された摘出弾、義足が恩賜品であることを示す木箱などです。また、戦争と義足の関係や、皇室から負傷兵に恩賜品として義肢が下賜されるようになった経緯など、歴史的な背景や、現在開発が進められているスポーツ用義足も紹介します。さらに、明治期に総理大臣を務めた大隈重信など著名人の義足とヒストリーや、個人で義足の開発・改良に挑戦した人物についても紹介したいと考えています。

---

主催： しょうけい館（戦傷病者史料館）  
会期： 令和3（2021）年7月14日（水）～9月12日（日）  
会場： しょうけい館1階 企画展示室  
入場料： 無料  
開館時間： 10：00～17：30（入館は17：00まで）  
休館日： 毎週月曜日 <8月9日（月）開館、8月10日（火）休館>

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、会期等を変更・中止する場合があります。

最新の情報はしょうけい館ホームページをご確認ください。

---

## 展示構成

### 1.戦争と義足

兵士が戦争で足を失ってしまうということはどういうことなのでしょうか。

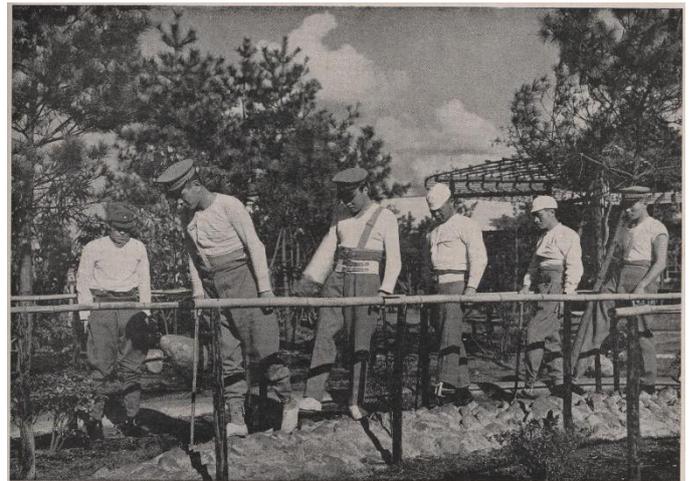
爆撃により身体の一部が瞬時に吹き飛んでしまった兵士、戦闘中に被弾して傷口から細菌が入り、破傷風やガス壊疽といった感染症に罹ってしまい、止む無く切断することになってしまった兵士が多くいました。また、中国東北部やソ連などの北方地域では、厳しい寒さの中での任務で凍傷になってしまい、切断せざるを得なかったこともありました。戦争末期になると、医薬品の不足によって小さな傷でも適切な処置ができなくなり、患部の悪化が進行してしまった結果、足の切断を余儀なくされた人も多くいました。

手足を失った兵士には、陸海軍病院で義手や義足が支給されました。これらの義肢は皇后からの恩賜品でした。

ここでは、戦地で軍医や衛生兵が処置を行った時の様子や、病院で治療・リハビリに励む負傷兵たちの写真などを紹介します。



脚を切断した負傷兵たち  
多くは若者でした



義足での歩行訓練  
（『臨時東京第三陸軍病院写真帖』昭和14年）

## 2. 義足と戦傷病者 それぞれの歩み

ここでは、5人の戦傷病者と義足の関係を中心に見つめます。本人の経歴のほか、戦場での受傷、切断を余儀なくされた時の状況や、治療とリハビリ、その後の生活について、心境も交えつつ紹介します。

### 2-1. エピソード I



この義足の持ち主は、1937(昭和 12)年、中国江蘇省の戦場で右肩と右足を受傷しました。局所麻酔でかかとを残して足の甲から先を切断する手術は、悲鳴を上げるほど痛かったと言います。除隊(退院)後に国鉄へ復職しますが、切断部位には歩くたびに傷ができるので、徒歩通勤が困難になり

やむなく退職し、役場へ転職しました。とはいえ、足の痛みは我慢する生活が続きました。

ここでは、義足などのほか、雪国ならではの労苦のエピソード、奥さんへの感謝の気持ちなどを紹介します。

### 2-2. エピソード II

この義足の持ち主は、1944(昭和 19)年にニューギニア島の戦場で肩と腕を負傷、その後の戦場で左足にも重傷を負い、感染症のためジャングルの中で切断手術を受けることになりました。その時の様子を「麻酔のうちうつろの内に骨をきるノコギリの音聞きつ眠れり」と短歌にしました。1946(昭和 21)年に復員しますが、衰弱のため結核にかかり、一時は生きる気力を失くしてしまったといいます。しかし家族の存在や恩師の言葉が心の支えとなり、仕事勤めができるまでに回復しました。



◀ 吸着式ソケット

ここでは、義足などのほか、戦場の様相や戦友、面倒を見てくれた当番兵への感謝の想いを讀んだ短歌や漢詩などを紹介します。

### 2-3. エピソードⅢ



この義足の持ち主は、1941（昭和 16）年 9 月、中国湖南省での戦闘中に右太ももに銃弾が当たり、切断手術を受けることになりました。病院に収容されるまでの間に、患部が深刻な感染症に侵されていたためでした。

除隊（退院）後は企業に勤めましたが、「歩くことが大変だから、健常者と一緒に勤めるのが辛かった」と言い、戦後は、実家の農業を継ぎました。終戦後の頃から、切断した脚の激痛に悩まされました。その痛みは「この世の地獄」という程で、効果のある鎮痛剤が手に入ったのは 80 歳を過ぎたころでした。

ここでは、義足のほか、義足で働く姿や家族旅行の写真を展示し、病院の患者仲間や家族とのエピソードなどを紹介します。

### 2-4. エピソードⅣ



この義足の持ち主は、1945（昭和 20）年に中国東北部で石炭輸送作業中の事故により、両足切断の重傷を負いました。病院に運ばれて事実を知った時、これではこの先何もできないから死んだ方がいいと考えますが、患部が治るにつれ「生き抜かなければいけない」という気持ちに変わったといいます。1947（昭和 22）年に故郷へ帰り、時計修理の技術を習得し、努力の末四年後に時計店を開きました。

ここでは、義足などのほか、家族の支え、時計店開業までの道のり、障がい者福祉団体の役員を勤めたエピソードを紹介します。

## 2-5. エピソードV



この義足の持ち主は、1942(昭和17)年にシンガポールの戦闘で右膝を負傷、太ももから切断することになりました。治療とリハビリの後、義足を支給されました。その頃は若くて体力があったため、義足での歩行にもすぐ慣れ、帰郷後は実家の農業を継ぎました。

ここでは、義足や戦地での写真などを展示するほか、戦後に地域の子供たちに足の切断部分を見せて平和教育に励んだエピソードや、雪道を歩く時に奥さん

さんが先頭に立って義足での歩行をサポートしたエピソードも紹介します。

## 3. 義足の開発と改良— “今” を生きる人と共に—

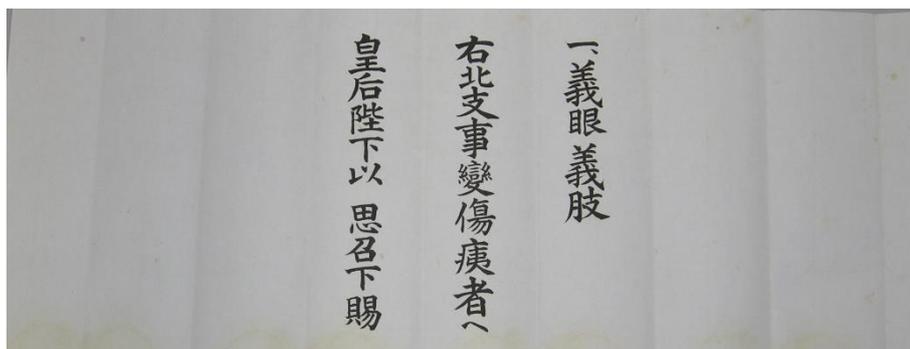
戦傷病者とともに歩んだ義足は、時代とともにより使いやすいうように変わっていきました。ここでは戦争に関連する義足の開発と改良の歴史や、恩賜の義肢が与えられるようになった経緯などを紹介します。



義足を納めた箱

戦傷病者ご本人の義足、大隈重信の使用していたアメリカ製の義足(早稲田大学大学史資料センター所蔵)を展示するほか、竹製の義足(川村義肢株式会社所蔵)や戦闘機で使用するための義足(航空自衛隊入間基地所蔵)、個人で開発した義足をパネルで紹介します。

また、現在私たちの身近で日常的に使われている義足、現在開発が進められている義足、パラリンピックで使用されている最新の義足についても、年表と共に紹介します。



沙汰書

## 映像上映

内 容：企画展に関連する映像を上映します。

日 時：会期中 10：00～17：00（一部上映休止日・時間があります）

場 所：しょうけい館1階 証言映像シアター

その他：鑑賞自由・無料

	映像タイトル	時間
10：00 }	近衛兵の誇りで乗り越えた労苦	17分
	障害を超えたおおらかさ	10分
11：00	心の優しさが生んだ義足の苦しさ	20分
	衛生兵の受傷	10分
11：00 }	癒えない傷に耐えて	21分
	夫の両脚となって共に歩んだ人生	24分
12：00	いつも傷痍の夫を想いつづけて	13分
12：00 }	家族を崩壊させた戦争を乗り越えて	30分
	右脚一本、海で生きた軍属	20分
13：00	人生を変えた一発の銃弾	10分
13：00 }	誠（まごころ）で守られた命	18分
	片脚を失くしても前へ進む	22分
14：00	失ったものを嘆かず、残ったものを鍛える	19分
14：00 }	支えられた歩み	15分
	歌声に祈りをこめて	23分
15：00	二人三脚で六十年余り	10分
	負けてたまるか！	10分
15：00 }	九十四歳。おおいに語る傷痍の人生	20分
	今日あることに感謝 明日があればさらによし	23分
16：00	義足で、田んぼでも畑でも働いた	10分
16：00 }	義足と妻に支えられて	24分
	誠（まごころ）で守られた命	18分
17：00	近衛兵の誇りで乗り越えた労苦	17分

## 残された言葉や声をたずねて

### 開催趣旨

---

戦傷病者は、戦中・戦後を通してさまざまな苦しみや辛さを抱えて生きてきました。彼らは、自身の体験を書籍や手記に綴ったり、映像で当時のことを語ったりしました。その中には、印象的な言葉や声が残されており、戦中・戦後に体験した労苦が詰まっています。戦地での思いや、戦後も続く傷の痛み、これまでの人生を振り返っての心境など、さまざまな場面で発せられた言葉や声の数々。

戦傷病者の多くは既に亡くなられており、直接話を聞くことはできません。本展では、残された資料からその言葉や声に耳を傾けます。

---

主 催 : しょうけい館 (戦傷病者史料館)  
会 期 : 令和4 (2022) 年3月15日 (火) ~5月8日 (日)  
会 場 : しょうけい館1階 企画展示室  
入 場 料 : 無料  
開 館 時 間 : 10:00~17:30 (入館は17:00まで)  
休 館 日 : 毎週月曜日・3月22日 (火) <ただし3月21日 (月) は開館>  
問 い 合 わ せ : しょうけい館 永島 電話 03 (3234) 7821

※状況により中止とさせていただく場合があります。中止の場合はホームページにてお知らせいたしますので、ご確認願います。

---

## 展示構成

### 1. 戦地での思い

#### エピソード1

「銃撃を受けた瞬間、傷口に手を当てたところ指が患部に入っていく、意識不明となった。」



出展資料：軍帽

中国での戦闘中、右側頭部に傷を負う

Aさん（仮称）は、昭和15（1940）年、中国での戦闘中に右側頭部に敵の銃弾がかすめました。当時の出来事を奥さんが次のように語っています。

「銃撃を受けた瞬間、傷口に手を当てたところ指が患部に入っていく、意識不明となった。」

生死の境をさまよい、21日間意識不明でしたが、奇跡的に一命をとりとめました。しかし、左半身麻痺とてんかんという重い後遺症を負うこととなりました。

#### 日常生活の労苦

その後、日本へ還送され東京の病院で治療を受けた後、新潟県の実家に戻ります。病状は一向に回復せず、特にてんかんの発作が起こった時は意識を失ってしまうため、家族全員で一晩中世話をしました。

#### けが以外による戦争の被害

昭和39（1964）年頃から、左半身麻痺とてんかん以外にも肝臓の障害を負うこととなります。戦時中X線検査で使われたトロトラストという造影剤には放射性物質が含まれていたため、体を内側から蝕まれました。この頃から1年のうち半年くらい入院するほどまでに病状が悪化し、亡くなるまで肝臓の病気に苦しめられました。

#### エピソード2

「世の中にこんな痛いことがあるだろうか。」



出展資料：書籍「水木しげるののん人生」

爆撃による負傷で左腕を切断

水木しげる（武良茂）さんは、昭和18（1943）年、ニューブリテン島（ラバウル）にて敵機の爆撃により左腕を受傷しました。当時の痛みを次のように綴っています。

「世の中にこんな痛いことがあるだろうか。」

ケガの容態は重篤であり、出血多量で意識も朦朧としていました。翌日には切断手術を受けましたが、後にマラリヤにも罹ってしまい、生死の境をさまよう体験をしました。

## 戦後の暮らし

昭和 21 (1946) 年に復員します。戦後の大不況により、食べるために働く生活が始まりました。さまざまな職に携わり、紙芝居作家、貸本作家、そして漫画家へと転身していきましたが、なかなかお金にならず、苦しい生活が続きました。

## 戦争体験と漫画

そんな中、昭和 40 (1965) 年に『テレビくん』で第 6 回講談社児童漫画賞を受賞し、一躍有名になりました。その後は『ゲゲゲの鬼太郎』『悪魔くん』など多くの作品を生み出してきました。また、戦争に対する思いは強く自身の体験を題材にした漫画なども多数生み出し、数々の賞を受賞してきました。

## エピソード 3

**「大腿部を切断する、よいか。」と軍医に言われた。瞬時の決断を迫られ、「お願いします」と声が出た。」**



出展資料：摘出弾

### 戦闘による負傷で右脚を切断

C さん (仮称) は、昭和 20 (1945) 年、中国河北省の戦闘において敵の銃撃により右脚を受傷します。陸軍病院に到着し、ガス壊疽と破傷風の危険があるため、軍医から右脚の切断を告げられました。当時の心境が映像と手記に残されています。

**「大腿部を切断する、よいか。」と軍医に言われた。瞬時の決断を迫られ、「お願いします」と声が出た。」**

片脚となった自分の姿を見る家族の顔を思い浮かべ、決断に苦しみましたが、右脚の切断手術を受けました。

## 戦後、1年以上中国を放浪

その後終戦を迎えますが、ソ連軍の侵攻や中国の内戦により、病院内の重傷者だけが取り残されてしまいます。C さんも片脚切断の重傷者であったため、1 年 3 ヶ月もの間中国を放浪することとなり、飢えの苦しみなど想像を絶する体験をしました。

## 傷の痛みと晩年の思い

昭和 21 (1946) 年に復員し、やっとの思いで日本に帰国しますが、義足による歩行訓練や仕事探しという厳しい現実が待ち受けていました。

戦後 60 年以上経っても傷の痛みに悩まされますが、苦勞というものは一生ついて回るものであり、自身に与えられた人生であると語っています。

#### エピソード4

「転がってきた手榴弾を見て、ハッと思った瞬間、轟音と同時に天地が逆さになり暗闇に落ち込むような感覚に襲われた。」



出展資料：摘出弾、小冊子、腕時計

#### 行軍の休憩中に敵手榴弾により全身を負傷

Dさん（仮称）は、昭和16（1941）年、中国河南省で行軍の休憩中に敵から投げられた手榴弾が破裂し、全身を負傷しました。当時の出来事を手記に綴っています。「転がってきた手榴弾を見て、ハッと思った瞬間、轟音と同時に天地が逆さになり暗闇に落ち込むような感覚に襲われた。」

意識が戻った後、陸軍病院へ向かうトラックに乗せられますが、全身が傷だらけであったため、険しい道を通

ると揺れが激しく、傷の痛み在必死で耐えていました。

#### 負傷の状態と治療

輸送先の陸軍病院で国防婦人会の慰問を受けた際、自分の顔の傷を見て驚き立ち去る姿にショックを受けました。また、治療の際に、身体を押さえつけられながら処置をされたのが辛かったと語っています。

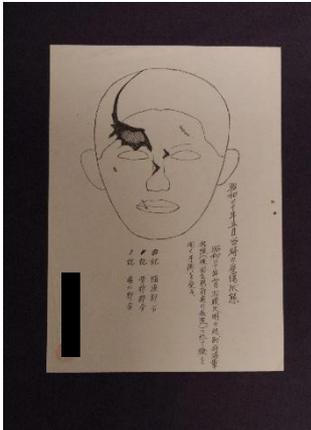
#### 帰国後の生活

内地還送後、さまざまな病院で治療を受けたことで、顔の傷はほとんど治りましたが、左指に障害が残ってしまいました。昭和17（1942）年、出征前に就職していた電力会社に復職します。指の障害は仕事の妨げにならなかったため、定年まで勤めることができました。

## 2. 戦後の労苦

### エピソード5

「激しく痛むときは、誰か殺してくださいと言いたい様な気になる。」



出展資料：当時の受傷状況

交戦中に爆弾が爆発し、頭部を受傷

Eさん（仮称）は、昭和20（1945）年、爆撃機を操縦中に南西諸島上空にて敵船と交戦していたところ、目の前で爆弾が爆発して受傷します。時折、意識を失いながらも安全な場所まで操縦し、一息ついたところで意識を失いました。6日後に意識が戻りますが、頭部の傷の状態が非常に悪く、額には穴が空き、片目は潰れている状態でした。

傷の痛みを耐える日々

戦後、国鉄に就職しますが、受傷の後遺症として、激しい頭痛や身体のしびれ、さらにてんかんの症状にも悩まされることとなります。当時の傷の痛みを次のように綴っています。

「激しく痛むときは、誰か殺してくださいと言いたい様な気になる。」

特に頭痛は想像を絶するものであり、助けを呼ぶにも起きていられず、治まるまでじっと我慢しなくてはならないため、死にたくなるようなことが何回もありました。

### 戦後の生活

痙攣や意識を失うといった症状は、仕事にも出てしまうため、周りに迷惑をかけることに対する恥ずかしさや、いつ症状が出るかわからないという不安にとっても苦しめられました。

### エピソード6

「お前が腕を失くしたのも、全ては戦争だと号泣する母の姿を見て、初めて生き抜かねばと思った。」



出展資料：新聞記事（複写）

「沖縄タイムス 昭和35年1月26日」

沖縄戦にて受傷し、右手を失う

Fさん（仮称）は、昭和19（1944）年、17歳の時に陸軍球兵隊部隊の筆生となり、物資の補給をする仕事をしました。翌年、南風原にて米軍の敵艦砲射撃により受傷します。陸軍病院に搬送され、手術により右手を失います。その後、退避していた壕内に投げ込まれた黄燐弾で、顔から足まで火傷を負ってしまいます。

生きる気力を失うが、母の涙で決心

戦後は、受傷したことにより生きる気力を失い、家族に反抗する日々を送ります。そんな時、普段勝気な母親が涙で諭したことで我に返り、生きる決心をしました。当時の心境が映像と手記に残されています。

「お前が腕を失くしたのも、全ては戦争だと号泣する母の姿を見て、初めて生き抜かねば思った。」

## 晩年の思い

その後、福祉に携わり人を助けることが自分の道だと直感し、福祉一筋で働き通します。一時期は死んだほうが良かったのではないかと考えることもありましたが、生きていて良かったと話しています。さらに、母親の一言が無ければ今の自分はいなかったと振り返っています。

## エピソード7

### 「どうして弾が当たった時に死ななかったのか。この世は地獄だ。」



出展資料：義足

#### 戦闘により受傷し、左脚を切断

Gさん（仮称）は、昭和16（1941）年、中国湖南省での戦闘中に銃弾が右脚をかすめ、左脚を貫通しました。野戦病院へ搬送され、左脚を根元から切断する手術を受けました。

#### 帰国後、厳しいリハビリを受ける

日本へ還送後、陸軍病院で厳しい歩行訓練を受けました。この病院では足を切断した患者が生活を送っていたため、同じ境遇である者同士心が通い合い、屈託なく過ごしてきました。

#### 切断した脚に激痛が走る日々

終戦を機に企業を退職し、実家の農業を継ぎました。この頃から、切断した脚の激痛に悩まされるようになります。一度痛み出すと七転八倒、この世の地獄という程の苦しみで、気を紛らわすためにお酒を飲んで暴れる日々が続きました。当時の痛みを映像で次のように語っています。

### 「どうして弾が当たった時に死ななかったのか。この世は地獄だ。」

脚の痛みから解放されたのは、効果のある鎮痛剤が手に入った時でした。この時、受傷から60年近くが経過していました。

## エピソード8

### 「偽名は光明園に来てから使いました。」



出展資料：トランク

#### 捕虜収容所でハンセン病を発症

Hさん（仮称）は、昭和19（1944）年のニューギニア戦線でオーストラリア軍の捕虜となり、カウラ収容所へ移送されました。捕虜生活中に体調不良を起こして診察を受けた結果、ハンセン病と診断され、隔離生活を余儀なくされました。

#### 帰国時の心境とハンセン病患者の扱い

戦後、日本へ戻ることとなりますが、捕虜になることは屈辱的なことであるという考え方が一般

的であったため、帰国したら殺されると思い、その心境は複雑でした。さらに、帰国する船でも甲板に隔離されるなど、人間扱いされませんでした。

### 偽名を使い、半生を送る

復員後、隔離されたまま国立病院へ搬送された後、静岡県<sup>の</sup>国立駿河療養所に入所しました。ところが、無らい県運動によって H さんと出身地が同じ患者が、駿河療養所に入所します。この時、自分のことが知られて故郷の家族に迷惑をかけてはいけな<sup>い</sup>と考え、本名を捨て、入所先も遠く離れた離島へ移るとい<sup>う</sup>一大決心をしま<sup>し</sup>た。この時の決心が映像と書籍に残されています。

**「偽名は光明園に来てから使いました。」**

その後、岡山県<sup>の</sup>国立療養所<sup>お</sup>久<sup>く</sup>光<sup>こう</sup>明<sup>み</sup>園<sup>えん</sup>へ入所します。以来、寂しさや怒りなどさまざまな葛藤を抱えながらも久光明園で生涯を送りました。

### 3.苦難を乗り越えて

#### エピソード9

「不自由だったが、不幸な人生ではなかった。感謝です。」



出展資料：書籍「読んでください」

#### 左腕を負傷し、麻酔なしで手術を行う

Iさん（仮称）は、昭和17（1942）年、シンガポール攻略戦の最中、ブキテマ高原での戦闘中に至近距離で砲弾が炸裂し左腕を負傷します。刺さった鉄片を麻酔なしで一挙に取り出され、失神するほどの苦痛を受けました。

#### 決死の覚悟で帰国

収容された陸軍病院で治療を受ける間、内地還送の命令を受けるものの順番が回ってこず、乗船できずにいました。しかし、先に出航した病院船はすべて撃沈されたというニュースを聞き、自身が日本に向けて出航する際には死ぬ覚悟で乗船しましたが、無事に日本に着くことができました。

#### 戦争体験と晩年の思い

戦後は、左腕が不自由というハンディを抱えた生活を送りましたが、自分で工夫してすべて行ってきました。60歳の定年後、身近な幸せのエピソードの話をまとめたミニコミ新聞を作るなど独自の生き方をされてきました。そして、幾度となく死線乗り越えたIさんが100歳を前にたどり着いた言葉は感謝でした。

「不自由だったが、不幸な人生ではなかった。感謝です。」

#### エピソード10

「戦争から帰ってきて、左手で描き始めた。目に見えない何かに左手を動かされている。これは使命だ。」



出展資料：絵画「金華丸」

#### 空襲を受け、右腕と右足を負傷

Jさん（仮称）は、昭和19（1944）年、兵員輸送の任務中に空襲にあい、右腕と右足を負傷します。その後運よく陸軍病院で治療を行うことができ、命は助かりましたが、右腕は元のように動かなくなってしまいました。左腕一本で絵を描く

戦後、塗装業の傍ら、船舶の絵を描き始めました。左腕一本で描いた絵とは思えないほどの出来栄えが評判となり、プラモデルの箱絵や、雑誌の表紙を飾るなど画家として独り立ちしました。

## 絵を描くという使命

戦争では、助かったというよりも生きて何かしなければならぬという気持ちの方が強く、戦死した多くの戦友の魂を慰めるとともに、思い出を書きとどめることが使命であると感じ、生涯を通して船舶の絵を描き続けました。

**「戦争から帰ってきて、左手で描き始めた。目に見えない何かに左手を動かされている。これは使命だ。」**

## 証言映像上映

内 容：企画展に関連する映像を上映します。

日 時：会期中毎日 10：00～17：00（一部上映休止日・時間があります。）

場 所：しょうけい館1階 証言映像シアター

その他：鑑賞自由・無料

上映時刻	映像タイトル	時間
10：00	感謝の心、妻にしたためて	23分
}	武良茂（水木しげる）にとっての戦傷	21分
11：00	人生を変えた一発の銃弾	10分
11：00	生き残った苦しみ ～CT 登場で認められた脳の変傷～	25分
}	母に支えられて…	31分
12：00	癒えない傷に耐えて	21分
}	捕虜と隔離が打ち砕いた人生	30分
13：00	生かされた人生への感謝	22分
}	がむしゃらに生きて、描く	18分
14：00	人生を変えた一発の銃弾	10分
14：00	軍隊経験 その光と影	22分
}	武良茂（水木しげる）にとっての戦傷	21分
15：00	感謝の心、妻にしたためて	23分
}	母に支えられて	31分
16：00	人生を変えた一発の銃弾	10分
}	捕虜と隔離が打ち砕いた人生	30分
17：00	がむしゃらに生きて、描く	18分